

巻頭言

「私たちだって大変なんだ」 を超えていく

伊丹 謙太郎 (法政大学教授/協同総研理事)

年末に関西にある某大学で社会的連帯経済やソーシャルファームに関わる近年の動向について15名ほどの学生の皆さんと議論する機会がありました。2019年に東京都で成立したソーシャルファーム条例の下、日本でも障害をはじめとさまざまな理由で就労困難な人びとが働ける環境を促進する動きが制度的にも広がり始めてきています。社会的連帯経済についても、2022年6月のILO総会のテーマとなるなど、国内外でも注目を集めています。この日は、「みんなのおうち」構想など、ワーカーズコープの取組を中心に国内外の複数の事例を紹介させていただきました。

参加されたのは、福祉系ゼミに所属される3年・4年の学生の皆さんでしたが、そのお一人から次のような感想をいただきました。「東京で新しくソーシャルファームの支援制度が生まれ、障害などが理由でこれまで就労できなかった方が働けるようになったことはいいことだと思いますが、私たち大学生もコロナ禍ですごく厳しい環境に追いやられています。政府や大人たちの社会から私たちが見捨てられているようで悲しい気持ちになります」。素朴な本心からの一言だったのだと思いますが、私はこの発言が気

になってその後もおりにふれ考えるようになりました。

政策には優先順位が生まれるのは致し方ないことですが、多くの人、とりわけ若者たちが「自分たちの苦しみが無視されている」という落胆をもって生活していることをどう捉え、どう声をかければいいのか、私自身もまた大学教員として、社会人として悩み続けています。学生の「私たちだって大変なんだ」という言葉は、「異なった大変さ」を抱えていながらも「大変である」ことを通し互いに距離を縮め、連帯を生むきっかけになるかもしれません。一方で、「自分のことで精一杯なので他人にはかまっていられない」という“何もしないこと”への言い訳や、「私たちじゃなくてあの人たちが先に助けられるなんて不公平だ。自分たちはなぜ後回しなんだ」という不満、「選抜や分断」の言葉にもなります。最初にとりあげた学生の「私たちだって大変なんだ」はこのどちらかではなく、いずれの意味でもあったのではないかと、その苦しさから発せられたものではなかったのかと考えるようになりました。

2014年に逝去された賀川督明さん(賀川豊彦の孫)は、こうした大変さを分か

ち合うことを「痛みのシェア」と呼んで大切にしていました。督明さんが(そして豊彦が)協同組合に期待したものは、Win-Winのようなドライな関係ではありません。Win-Winは、自分が損をしない(自己利益に結びつく)ならどのような人間と関係を結んでもよかろうという思想であり、相手がいかなる者であるかという想像力は不要です(これは私益の追求が公益を実現するという偏った市場崇拜の思想と同根です)。賀川の協同組合論では、「相互扶助」(メンバー同士の相互利益)ではなく「相愛互助」「互助友愛」という言葉が用いられています。困っている、大変さを抱えた具体的な相手に対し、自分には何ができるのかという強い思い(=愛)から互助が生まれるのだと賀川は言います。Win-Winの思想には欠けている「目の前の他者を知ろうとする」姿勢から相愛互助の協同組合運動はスタートします。苦しみを独りで抱え続けるのではなく、分かち合うこと。そのために必要なのは、誰かに自分の苦しみを認めてもらおうと待ち続けるのではなく、まずは私が誰かの苦しみに寄り添おうとすることではないでしょうか。

格差是正や差別解消のために推進される政策は、これまでの世界に満足してきた者には「えこひいき」「逆差別」のように映ることがあります。私たちが対等に向き合える共生社会を創ろうとする政

策が人によって真逆に見えてしまうのは、自分の手を離れた遠いところで物事が決定されているという印象が無力感を生むからです。新しく生まれる世界がよりよいものであるという強い実感を持ちつつ、私たち一人ひとりが「未来を創る当事者」として新しい制度づくり・関係づくりに積極的に関わっていける途があれば、他者の抱える異なる大変さを自分のものとしてうけとめ、その克服に向けて多様な人びととの間に連帯を築くことにつながるはずです。

そして私自身が未来を創る当事者となるためには、「学生の私」というカテゴリーを超えていくことが大切です。まちおこしや地域づくりで何より大切にされるもののひとつが、多様な人びとと一緒に語り合い作業し時間を過ごすという経験の共有、協同の実践です。その際、「学生」という名札は余計かもしれません。全国の大学に続々と生まれているワーカーズコープの寄附講座は、大学生としての学びを超えた地域と組合員と大学生の間に生まれる共通の学びを通して「未来を創る当事者」として育つきっかけを与えてくれるものだと思っています。寄附講座での学びを通じてこそ、上述した「大変さへの感受性」は課題解決への努力を継続させる糧となるはずです。こんな時代だからこそ、学生を超えた視点を与えるワーカーズコープ寄附講座が全国に広がることを願ってやみません。